

昭和の東南海地震体験談

氏名:塩地 博昭(しおじ ひろあき)
生年月日:昭和 11 年 1 月 5 日
地震を体験した場所:那智勝浦町
当時の家族状況:祖母、母、叔母、従兄弟(2人)

本人の希望により写真は
掲載しておりません。

1)地震発生時の状況

当時小学校 3 年生で、当日下里小学校の 1 階の教室で授業中に地震があり、先生が「地震だあー、危ないから外に出ろ」というわけで、当時の下里小学校のグラウンドは芋畑になっていて、そこに飛び出して、じっと怖さをこらえていた。

2)津波襲来時の状況

しばらくすると路地から小父さんや小母さんが「津波が来るぞー、山へ逃げろ」と何回も何回も叫びながらやって来た。

高芝の人たちが浜へ出てみたら潮がグーンと引いていったので津波が来るとすぐに判断できた。小学校の裏山は当時薪に全部利用していたので、坊主山だった。当時一クラス 40～50 人くらいで、全校生徒約 300 人が裏山に避難し、山の上から津波の様子を見ていた。当然町の人たちも山に登ってきた。

津波など知らなかったが、知らないままに、ただ茫然と恐怖感一杯で津波を見ていた。夏になると大浜で高さが 2～3m くらいの土曜波が起き、それに突っ込んで遊んでいたもので、その高さの波は体験していたし、台風の波も経験していたが、そんなものではなく、それよりも倍以上の大きな波がワーツと押し寄せてきた。

それはもう怖いというか、壮観というか言葉で言い表せないほどのすごいものだった。

その波は高芝沖の立石を呑み込みながら、太田川から下里地区に入り込み、行きは波がまくし立てて入り込んで行く感じだった。

3 時間ほど山にいと繰り返し、繰り返し余震があった。余震のたびに、津波が押し寄せてきたが、第 1 波ほどの大きさは、そのあとはなかったが、下里の江川を乗り越えて街中まで入った。波は大浜を超え、国鉄下里駅近くまで入っては引く、を繰り返した。

3 時間半程経った後、小学生の低学年は、上級生のお姉さん方や高等科の人に連れられたり、父兄も迎えに来て、みんな自宅に帰った。

3)家族の行動・被害

自宅に戻ると家族の心配は大変なものだった。

皆帰宅していて、無事だったが、太田川を見ながらぶるぶる震えていた。

家屋にも被害はなかった。当時の家は八尺鏡野の踏み切りの近くにあり、太田川が一望できた。その後も余震の毎に、川に波が逆上している光景にでくわした。

しばらくたって、家族で小学校の裏山に避難し、みかん畑に簡単なシートを敷いて、寒さを凌ぎながら、提灯と蠟燭で一晩過ごした。

4) 集落・周囲の被害

周囲に倒れた家は 1 件もなかったが、下里地区には中州があって、すぐそばの江川には松林や竹林があって、それが防波堤になっていた。

津波はそれを乗り越えて下里駅まで押し寄せた。その時、はじめて大変な津波だったんだ、と実感した。当時製材が盛んで、太田川から丸太を中洲の数軒の製材所に流していた。

そこには丸太が一杯積んであり、製材を待っていた。その丸太が全部引き潮で浜辺ではなく、ズーッと沖まで一気に流された。

裏山から見えた災害状況は下里一帯の範囲だけで、家に帰って初めて太田川の状況がわかった。それは凄まじいもので、地震はそれほど怖いと思わないが、今度の津波のとき逃げるのにどうしようかと必死だった。

幸いに高芝の当時の堤防は高く、波が入らなかった。むしろ浦神の親戚が心配になり翌々日に出向いたら、親戚の家屋は床下から 50cm、多い所で 80cm くらい波で浸水していた。

何軒かの親戚を回って大変だったねと話しながら帰ってきた。

5) 地震・津波後の生活

水は井戸水でまかない、自宅には電気もあり、食糧ともに生活に不自由を感じたことはなかった。

6) 次の災害への備え

服、靴、ラジオ、懐中電灯及び雨合羽をリュックサックに入れ、脇の駐車場に用意している。避難場所も八尺鏡野区には 4 箇所あり、自主的に防災計画も立案している。

以前役場の担当者が防災の話をしにきた時、80 世帯中 77 世帯が出席するほど防災に対しては熱心である。